



アユ資源管理

在り方を検討

第1回会議 関係者が意見交換

「アユ資源利用管理のあり方検討会（仮称）」発足、第1回会議がこのほど、延岡市愛宕町の県延岡総合庁舎であり、内水面漁協や海面漁協、アユ養殖組合など関係者約20人が参加して意見を交わした。

第1回の「アユの資源管理のあり方検討会（仮称）」会長（北川漁協）が「知

恵を出し合って、アユをどのように増やし、維持管理していくかを考えていただきたい」と呼び掛け、県水産政策課の田中宏明課長補佐は「スタートしたのは意義ある第一歩」とあいさつした。

発起人である県内水面漁連の長瀬一己代表理事（北川漁協）が「知

の漁獲量は、減少の傾向にあるとして、「これといった案、対応策が出ないまま。ここ1、2年は特に減少が激しい」と、関係機関だけでなく、観光にも影響する大きな問題であり、今後の対策が急務だと説明した。

趣旨について県内水面漁連の森末保治専務は、県北が主体である県のアユ

昭和56年ごろと、ここ10年ほどの放流量は倍以上なのにアユの数は減っている。どうすればよいか分からない」などの不安の声も上がった。

関係機関からさまざまな意見や質問が出されたが、長瀬会長は「アユは誰の物でもなく、自然のもの。自然が育んできたものを人間があらゆるところで取っていないと、河川、海、観光の目標を一緒にしないと会が進まない。現段階では何をやるかではなく、掲げ

る目標を見つけましょう」と呼び掛けた。約1時間の会議では「資源を守るために力を合わせる」で一致。今後は、年に3度の会合を開いてアユ資源回復のために考え、実行していくことを決めた。

会議終了後は、高知県香南市のたかはし河川生物調査事務所の高橋勇男さんが、アユ資源の回復について話した。高橋さんは、全国各地の河川で天然アユを増やす活動に取り組んでおり、県北で

も2年前から北川や五ヶ瀬川でアユの生態調査を続けている。

また、この会議には、大分県企業局や延岡観光協会なども出席、会員と一緒にアユの調査報告や各県での取り組みについて学んだ。